

## イザベラ・バード秋田の旅：プロローグ

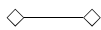
2018年1月1日 掲載 2018年1月15日 更新



まさに危機一髪だった。

1878（明治11）年7月27日、切石（きりいし）—小繋（こつなぎ）（いずれも能代市）間の米代川。激しい流れで方向を失った屋形船が、下流にいた平底舟に向かって来た。衝突する！と思った瞬間、屋形船が木に接触。乗っていた何人かが川に投げ出された。

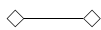
無事だった平底舟にはイザベラ・バードが乗っていた。日本の旅に出てこれほどの危機は初めてだ。そもそも舟に乗ること自体、無謀だった。数日來の雨で川は増水し、切石の渡し場で舟は止められていたから。だがバードは小繋に戻ろうとする平底舟と出合ったのを幸い、渦巻く激流にひるむことなく乗り込んだ。この時バードは46歳。約150センチの小柄な体で、脊椎には疾患を抱えていた。



1カ月前の6月10日、バードは東京からアイヌが暮らす北海道に向けて出発した。当時、外国人が立ち入れる地域は開港付近など限られていたが、英国公使館の全面支援を受け、ほぼ自由に内地を通行できる旅行免許状を入手。外国人に人気の観光地・日光、新潟の英国人宣教師宅での滞在を経て、いよいよ北日本の未踏路に足を踏み入れる。

一部の地方都市で進む近代化、地域にはびこる貧困、病氣、迷信。自身が直面した苦勞と共に、日本人の優しさや礼儀正しさもバードは「日本奥地紀行」に書き留めた。そして冒険も。秋田、とりわけ県北では冒険的な色彩が際立つ。

県北はこの夏、数十年來なかつた大雨に見舞われていた。当時の遐邇（かじ）新聞（現秋田魁新報）によると、7月22～26日までの雨で大館町（現大館市）やその付近の村はひどい洪水になったとある。水との闘いはこの後も続くが、危機に遭遇するほど彼女の筆致は生き生きと、時にはユーモアすら漂わせる。

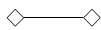


幼い頃から病弱だったバードが旅に出たのは医師から転地療養を勧められたのがきっかけ。20代での北米大陸の旅に始まり、徐々に未踏の世界に入っていった。

来日する5年前、ニュージーランドからハワイへ向かう船の中で激しいハリケーンに遭遇。だがバードは冷静に状況を観察、危機によって心身の健康回復が図られることに気付いたという。知人への手紙に当時の心情をこう記す。

「これまで知らなかつた世界に生きている感じです。自由で、新鮮で、活力にあふれ、気楽で、何の足枷（あしかせ）もなく、好奇心に満ちた世界なので、寝る間も惜しいほどです」（金坂清則著「イザベラ・バードと日本の旅」）

その後を訪れたハワイで、バードは火山の噴火口付近でキャンプを敢行。ロッキーマウンテンでは4千メートル超の山に挑戦。冒険心あふれるレディー・トラベラーの誕生だった。



米代川での冒険は4時間にも及んだ。クライマックスは川の兩岸で対峙（たいじ）するきみまち阪（ざか）と七座（ななくら）山の風景。「紀行」ではこうつづる。

<夕暮れが近づくと霧も晴れ、眼前に絵のように美しい風景が現れた。そして小繋の近くで川は松と杉が鬱蒼（うっそう）と茂る急傾斜の山が兩岸に迫る狭い峡谷の奥へと消えていく>

危機を乗り越えたからこそ、この光景はバードの心に染み込んだだろう。

※「日本奥地紀行」の引用は、いずれも「完訳日本奥地紀行」（金坂清則訳注、平凡社刊）より。

【日本奥地紀行】題の直訳は「日本の未踏の地—蝦夷の先住民、日光、伊勢訪問を含む内地旅行の報告」。1880年にジョン・マレー社から出版され、英国で絶賛される。85年に関西部分などを削除した簡略版が出された。日本では1973年、高梨健吉翻訳で簡略版が「日本奥地紀行」として出版。近年は完全版に基づく「完訳日本奥地紀行」（金坂清則訳注）なども出版されている。